

新総長インタビュー

山極 壽一

大学とは、

窓

である。

総長になって

—総長に就任した際のお話を聞かせてください

総長になるというのは夢にも思っていませんでした。実は今年の5月にアフリカで生物多様性の保全や、郷土研究に関する国際シンポジウムを企画してたんですよ。それはこれから私が研究者として後進たちを育てながら国際協力をしていく礎となるはずのシンポジウムでした。ところが新総長の推薦投票で2番目になって、所信表明を書いてください、とお願いされました。

—本当に突然の話だったのですか

私には執行部の経験はありませんし、ましてや理事の経験もありません。そんな人が総長になったところで、大学運営をうまくできるわけがないんです。私自身は、残り少ない教員としての職責を果たそうと思っていましたから、総長になれと突然言われても困りました。そういった理由もあって、所信表明には京都大学に対して私が感じている率直な思いを書きました。

—どういった内容だったのですか？

そのとき一番重要だと思ったのは、京都大学は学生が主役になるべきだということでした。その学生たちを舞台の上に立たせるために、我々教員は研鑽を積んで活動しているのだ、と。そのためには、学内を学問のできる場所にしないといけない、だから改革をする必要があるのだ、ということを書きました。

現在文科省は国際的な競争力のある人材を育てる学問を奨励していますが、大学というのはそれだけの場所ではないのです。もちろん世界に向かって発展をしていかなければなりませんし、社会のために貢献しなければならないことも確かですが、それでも100年後に世界を変えるような研究の芽を育てることも大学の立派な役目だと思います。大学は面白い発想をたくさん生み出すことができるような場所であってほしいと思っています。

はみだし
すてーじ

ガラケーこそ至高！
⇒つい最近タブレットを購入しました。

(総・4 じゃすみん)
(ガラケー使わなくなりましたね；編)

京都大学に入学するまで

—総長の生い立ちを教えてください

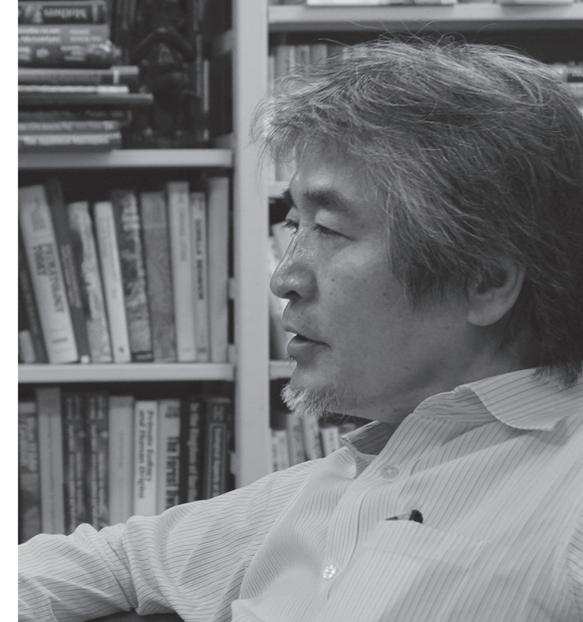
私は、東京の国立というところで高校まで育ちました。そこは当時まだ田舎で、小さい頃は昆虫採集をしたり、蛇やトカゲを捕まえたり、ドジョウを捕まえて食べたりと、今の都会の子供たちには考えられないような自然に親しんだ生活をしていましたね。小学校の時から休日になると父が山へ連れて行ってくれたので山に登ってはいろいろなことを考えていました。

中学生時代はいろいろなことに興味があり、さまざまなことに挑戦していました。劇が好きだったので、文化祭の時に私が監督になって劇の披露をしたり、バスケットボールクラブに入ったりしました。担任が国語の先生だった影響もあって、読書に没頭したこともありました。

私が高校2年生のときから高校紛争時代に突入しました。当時の高校生は日本の政治に対して非常に高い関心を持ち、高校生が立ち上がらないとダメだという考えのもと、学生集会を開いたり、弁論を繰り返したりしていました。授業がほとんど無かったので、自主ゼミを開いて、後輩に勉強を教えていました。

—京都大学を目指したきっかけはなんですか？

私の高校では進路先として東京の大学を目指すのが普通でした。ただ私は、高校3年の秋頃から人間関係も複雑になってきて、可能であれば東京を離れたと思うようになりました。そこで当時、教科書を一生懸命勉強すれば合格できるといふ評判があった京都大学を目指すことにしました。



Profile

1952年東京生まれ。京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。カリソケ研究センター客員研究員、(財)日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手を経て、京都大学大学院理学研究科教授に就任。2014年10月より、京都大学総長に就任。

大学生時代の思い出

—京都大学に入学されてからはどのような大学生活を送っていましたか？

当時は大学紛争の本質的な部分は終わっていたものの、まだいくらか残っていました。私は東京のしがらみを捨ててのびのびと大学生活を送りたかったので、そういったことは関わらず、スキー部に入りました。オフシーズンには京都市内を走り回って体力を作り、シーズンになると長野県の志賀高原にあるヒュッテに行きスキーの練習をしていました。全関西の大会では4位入賞を果たすまで打ち込んでいました。

—学問はどんなことに興味を持たれていたんですか？

スキーの練習のために志賀高原にいたとき、人類学の研究のためにニホンザルを観察している京都大学の大学院の方に

出会いました。当時、人類学は人間のみを扱う学問だと思っていましたから、サルを観察するというにすごく興味を覚えました。高校時代、過去の思想家の本をたくさん読みましたが、人間とは何かについて具体的な答えを得ることができませんでした。だから、自然科学の面から人間についてアプローチをするのは面白いなと思いましたね。それから理学部の研究室に出入りするようになって、そこで伊谷純一郎先生に出会いました。先生のお話を聞くうちにますます人類学に興味を持つようになって、人類生態学ゼミという自主ゼミを作りました。他にも文学部の人類学の自主ゼミにも理学部生ながら参加していました。京都大学らしい「自学自習」の精神のもと、学生たちが自分たちの興味があるものを勉強する中で、知識を深めていました。

はみだし
すてーじ

壁 | ω・) はみっ
⇒思わずキュンとしちゃいましたね。

(文・1 ポール)
(かわいいものには弱いのです；編)

人類学とは何か

—人類学の面白さってどういったところにあるんですか？

日本の霊長類学の創始者であり、京都大学の自然人類学講座の初代教授でもあった今西錦司先生がおっしゃったのは、人類学で一番面白いのは「ホミニゼーション」だということでした。

—ホミニゼーションとはなんですか？

ホミニゼーションとはヒト化と訳します。つまり、サルや霊長類の性質をもった祖先からだんだんと人間になっていく過程を総合的に捉えようとするのがヒト化、ホミニゼーションなんですね。当時いろいろな分野の人たちがヒト化について議論していました。

そもそも今西先生がサルを見て人間を知ろうという試みを始めたのは、家族に着目したのがきっかけでした。

—家族、ですか

日本の霊長類学における最初の研究課題は家族の起源でした。1948年にニホンザルの研究から始まり、やがて人間により近い類人猿であるゴリラの調査を始めました。なぜ今西先生たちが家族の起源を調べるためにゴリラの研究をしていたかということ、当時野生ゴリラの実態はよくわかっていなかったのですが、人間の家族に似た家族構成をしていることがわかってきたからです。人間の家族の起源を知る上で重要な手がかりを得ることができると考えられていました。

当時ゴリラは世界的にも人類の進化を探る上で重要なターゲットでした。しかし研究のためにゴリラを人間に慣れさせるには大変な苦勞があり、慣れさせることに成功したところには、日本はゴリラの

研究から手を引いてしまっていました。だから、「家族の起源」という日本の霊長類学の目指すテーマでゴリラの研究をする必要がありました。

私は1975年に大学院に入って、初めはニホンザルの研究をしていました。ニホンザルの調査を一通り終えた後で、伊谷先生から声がかかり、ゴリラの研究を始めました。



▲研究室にはゴリラやサルなどの置物が多数ある

「家族」とは何か

—家族というテーマについて、山極総長はどうお考えでしたか

実は家族というのは高校時代から温めていたテーマでもありました。当時議論したのは、「なぜ人間は家族に縛られて生きるのだろうか」ということでした。家族は一生切ることのできない特別な絆で結ばれていますよね。自分の生まれた環境によって人生は大きく影響されて、しかもそれを切ることができないというもどかしさを高校時代すごく感じていました。そういった長年自分が抱えていたことを大学の研究テーマに結びつけることができるんじゃないかと思いました。

—具体的にはどんな研究を？

私が研究しているのは、人間の祖先がゴリラやチンパンジーとの共通性を持ちながら、進化の道を歩んだ過程で人間の

みが獲得した特徴がどういった背景で形成されたかについてです。形態では二足歩行、社会でいえば家族などの特徴ですね。そういったことを探る過程で、実は人間社会の中に厳然としてあったはずの家族の存立基盤が今、揺らいでいるということに気づき始めました。そして近年、「家族とはなんだろう」ということを再び考えるようになりました。

—高校の時の疑問に戻ったのですね

家族という社会形態はこれから存続していくのか、未来の社会にはないのか。現在では結婚せずに単独で子供を育てている男女や、地域と全くつながりを持たない家族も存在します。家族の新しい形態が形成される時代に差し掛かったときに改めて家族とは何だということを探り直す必要があるように思います。

(法・3 フレッシュレモン)
(降参です；編)

はみだし
すてーじ

人生とかけまして、調子にムラのある投手ととく。そのころは？
⇒しばらく考えたのですが、わかりませんでした。

大学という

W Wild & Wise

野性的で
賢い学生を育てる

窓

での
活動方針

W Women & Wish

女性が輝けるキャンパス
学生が希望を持てる大学を

I International & Innovation

国際的で
革新的な能力を重視する

山極先生は総長に就任するにあたり、今後の活動方針を英単語のWINDOWに沿って掲げました。なぜ窓なのかは下のインタビューをご覧ください。

O Originality & Optimism

創造性を持ち
楽観主義の学生を育てる

N Natural & Noble

自然に学び
高潔な精神を目指す

D Diversity & Dynamic

多様性を認め
激動する社会で活躍する

大学とは&京大生へメッセージ

—山極総長は大学はどうあるべきだとお考えですか？

大学は「窓」だと考えています。つまりWINDOWですね。大学の中は社会からは少し距離をおいて、学問ができる、温かくさわやかな風が吹いてほしいと思っています。ただその窓の外には激動する世界と社会が待っています。それは裏を返せば活躍できる場所でもあるわけですね。その窓を開けて外の世界へ学生たちを送り出すのは教員の役目だと私は思います。学生というのは学部生だけではなくて、大学院の学生、ポスドク、若い助教まで含んでいます。彼らはこれから先、未来の世代を背負って社会で世界で活躍する人たちです。彼らをきちんと送り出す義務が私たち教員にはあると思います。そういった意味で大学を窓と称しました。

はみだし
すてーじ

一緒に一人鍋をする仲間がほしい
⇒その昔友達にヒトカラに誘われました。

—具体的にどのような改革をするつもりですか？

現在文科省は総長の権限を高めて、大学の改革を加速するように言っています。しかし私が思うに、全学の合意をきちんと得ることができれば、総長の権限を高めずとも改革を行うことができると思います。そういった意図もあって、執行部は大学内のすべての学部、研究所、センターから理事を選出し、構成するようにしました。

—全学の意見をしっかり吸収できるようにしたのですね

情報はなるべく早く公開して、各部署で話し合っ、意見を部局会議で出していただいて、全学の合意を速やかにとれるような体制にするのが私の今回の執行部における大きな方針です。

—最後に、京大生にメッセージをお願いします

しっかりと対話や討論ができる学生になってほしいと思っています。昔からそうですが、京大生はすごく発想力に富んでいます。ただそれを対話の中で高めて面白くしていくということが現在の学生には少し欠けているように思います。私たちの時代と比べてもですね。京大生の発想力というのは学生同士、あるいは学生と教員が仲良く話し合いながら、楽しく面白いことを考えることでさらに育っていくと思います。それをどんどん実践してほしいですね。教員の立場で言えば、学生が学問のことについて質問してくれると嬉しいんです。だから物怖じせずに教員の研究室に押しかけて学問的な討論してほしいと思います。

—ありがとうございました

(理・3 ねおん)
(でも友達によるとそれが大事みたいです；編)